エッセイ

身辺雑記・その２―シナリオ修業体験記―

谷口　晃　脚本家

退職後、教師を辞めて、東京へ出た。単身遊学である。女房殿を拝み倒して、新宿近くの野方に、バストイレ付き６畳一間の下宿を借りてのひとり暮らしである。

教師の頃に演劇部の顧問をして、芝居作りには関っていたが、クラブ顧問という中途半端な形で、夏のコンクールが終わると教師に戻るという感じで、芝居に対する意識も中途半端で、愛好家の域を出ないという程度のものだった。退職する数年前から、名古屋で、鴻上尚史の演劇ワークショップに参加したり、御園座なんかに蜷川の『近松心中』や同じ蜷川の『―近代能楽集―弱法師』など、また富山県の利賀村に平田オリザの芝居を観に行ったりもした。退職が近付いた頃に残りの人生を考え、自分の来し方を振り返って見たとき、芝居作りで満足の行く仕事を残してないことが悔しい思い出として頭の中に残っていた。

もう少し芝居の勉強をしたいと思った。

２００１年からの東京生活は、今、振り返ってみても非常に刺激的なものだった。１年目は昼、日大芸術学部に通い、現代演劇に関する単位を１４単位ほど取った。２年目は早稲田に通い、同じく現代演劇に関する単位を８単位ほど取った。夜は週イチで高田の馬場にあるシナリオ作家協会が経営するシナリオの学校『シナリオ講座』に通った。現役のシナリオライターが専任講師として教鞭を執り、月イチで有名ライターのゲスト授業があった。井上由美子、馬場当、新藤兼人、山田太一、加藤正人、西岡琢也、柏原寛司、鈴木尚之、河瀬直美、舟橋和郎、宮川一郎、阪本順治、等々。シナリオ講座は１年の在籍で、前半の半年は基礎科で、１時間のシナリオを書くことが目標で、後の半年は研修科で２時間のシナリオを書くのが目標であった。

在籍して知ったのだが、シナリオコンクールは無数にあり、テレビ局主催のシナリオコンクールも毎年盛大に行なわれているのだ。テレ朝シナリオ大賞・賞金８００万円、フジテレビヤングシナリオ大賞・賞金５００万円、橋田賞新人脚本賞・賞金１００万円、ＷＯＷＯＷシナリオ大賞・賞金５００万円等々、他にも沢山のコンクールがあり、テ

レビ局主催の大きな賞だと１５００人から２０００人近くが応募する。テレビ局のコンクールは入賞者をその局が育てることを目標にしており、シナリオライターになるにはシナリオコンクールに入選することが、一番確実な方法であるとされている。シナリオ講座基礎科の一時間のシナリオの完成は、そのままその作品をその年のコンクールに応募できるわけで、シナリオ講座の約５０名、職業不詳の集団がコンクールを目ざして目の色変えてシナリオの勉強を始めた。

わたしも演劇の脚本の勉強にと思いみんなの後に続いて準備を始めた。毎年、５０人の集団から２人から３人の確率でプロのシナリオライターが誕生しますと講師はいう。受講生たちは専任講師のもとに書き上げた自分の作品を持って行きアドバイスをもらう。夜の授業だから親しくなると飲み会が行なわれた。山手線高田馬場駅は早稲田の学生などが乗り降りする駅で、まわりに飲み屋が沢山ある。飲み会は専任講師も原則参加してくれ、それが縁で、テレビ局や映画界へ入るきっかけにもなる。さて、ほとんどのシナリオ講座の受講生がテレ朝のコンクールに応募したのだが結局、一次通過した合格者はひとりだけだった。その後、講座生のひとりが頑張ってフジヤングシナリオコンクールで、佳作に入り、現在プロになって活躍しているが・・・。

東京での２年間の生活を終えて、三重の地に帰って来た。帰って来た頃には、やることは芝居から映画シナリオの勉強に変わっていた。さらに勉強の内容も、もう決っていた。沢山映画を観て、シナリオを読むことである。自宅ですべて足りると思って、自宅にこもる生活を始めた。シナリオも年２本以上の完成を目指して書き続け、コンクールに応募し続けた。有名な作品をレンタルショップで借り出して、画面と首っ引きでセリフを写し取ったりもした。しかしコンクールは、一次も通過しなかった。審査結果を見ると、最終選考に残っている人のなかに時々「シナリオ講座」で一緒だった仲間を発見したが、彼らも入選までもいかなかった。徐々に精神的に参ってしまって、鬱病でないかと自分を疑う始末だった。

シナリオを書き始めて４年目の２００６年３月、家に一本の電話が入った。「シナリオ作家協会から電話」と、女房。鬱病気味でも２本のシナリオをコンクールに応募していたので、もしかしたらと思って電話に出ると「谷口さんの『ピンクシナリオ賞』に応募した『Four letter word　～

耳元でそっと囁いて～』が入選しましたので、お知らせします」という通知だった。「えー！ピンクの方か・・・」多少がっかりしながらも一方では嬉しかった。応募した作品が毎回毎回落ちるのは精神衛生上非常にキツイ。追いつめられていた自分を、ピンクシナリオコンクールが救ってくれた一瞬だった。それからは作品が映画化される話にトントン拍子に進んで、いまおかしんじ監督の郷里の堺でロケをやることになった。いまおか監督の配慮で、ロケ現場に招待されドキドキしながら撮影を見学した。

現場は中学の同窓会の場面。街の料亭。二次会のスナック。待ち時間が結構あって、みんな輪になりながら色んな話をする。「いまおか組」は和気あいあいでキャストもスタッフもわたしのことを「先生」と呼んでくれて恐縮した。現場ではわたしひとりが一年生だ。「先生」だなんて・・・。

「先生」といわれながら見学していたが、撮影しているカメラさんが「いい、ホンで・・・」とポツンといってくれた。

「ええっ！いいホンて・・・まさか！初めての作品で、まったく自信がないので・・・どこがいいホンです？」勇気を奮って聞いてみる。

「カミさんが病院で寝ていて、見舞いに来た鮒吉が病室から帰って行くとき、背中に向かって「スケベ・・・がんばりなはれ」というところが、いいですねえ」といってくれた。

―（作品はピンク映画だが退職老人の世界を描いたもので、主人公の鮒吉はもと左官工で、中学の同窓会で昔の彼女に会う話である。鮒吉の女房は癌で入院している。女房は病室に単行本を持ち込むような固い女である。一方の鮒吉は近所のスーパーで痴漢まがいの覗きをやって主婦から苦情を持ち込まれたりする。妻の智子は長い結婚生活のなかで、そんな鮒吉をきっと受け入れられなかったであろう。しかし、余命いくばくもないいま、病室を後にする鮒吉の後姿に、智子「スケベ、がんばりなはれ」とやさしく励ます）―

いまおか組のカメラさんがそれをいいといってくれた。堺のロケ現場を離れる時、わけもなく気分的に高揚している自分を感じていた。シナリオを書き続けていて良かったと思った。